

「体ほぐしの運動」による人間関係の変容 についての一考察：幼児を対象にして

三坂 涼子

コーチング学専攻
指導教員 遠藤 卓郎

**A consideration about the change of human relations by
"Karada-hogushi" : for an infant
Ryoko MISAKA**

The purpose of this study was to investigate the change of the human relationship of infants brought by "Karada-hogushi" which is the conceptual physical activity structured to open children's mind and body. For this purpose, the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA) was applied for qualitative and quantitative analysis of communication of eight 4-5 years old children in the gymnastic club. "Karada-hogushi" included physical activities that make children express themselves and contact each other. Video taped gym classes were analyzed. Results showed that the "Karada-hogushi" did influence remarkably the communication between infants. Two types of change, the activation of the communication and the increase in frequency of body-touch were observed immediately after the expression activities and the contact activities respectively. The former indicates that the physical expression activities of "Karada-hogushi" activated the infants not only physically but also mentally. The later suggest that mental distance between infants was shortened by the direct contact activity included in "Karada-hogushi". Therefore, it is concluded that "Karada-hogushi" can activate the interaction between infants by making their mind open.

【はじめに】

子供のコミュニケーション（以下 Com）能力の低下が指摘されている現在、仲間とのふれあいを重視したプログラムが、教育現場において、重要視されてきている。しかし、本研究で対象としているような幼児を対象とした、仲間とのふれあいを重視したプログラムの有効性を明らかにしている学術的な研究はあまり見受けられない。

また、小・中・高の体育授業分析の研究では、体ほぐしの運動（以下体ほぐし）の有効性を仲間との交流という視点から見ている研究が多くなされている。しかし、そのほとんどが、アンケート調査によるものであり、この方法を幼児には使うことはできない。なぜなら、幼児は「お友達と仲良くできましたか？」と質問すればみんな「はい」と答えてしまうから

である。自分の思いを言葉にして上手く説明することが難しい幼児を対象とするには、仲間との交流をそれにふさわしい方法で分析していく必要がある。

そこで本研究の目的として「体ほぐし」による幼児の人間関係の変容を、Com の変化から分析することとし、目的を達成するために以下の2つの課題を設定した。

〈課題1〉 修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ（以下 M-GTA）を用いて、「幼児の体操教室での Com 分類カテゴリー」を構築する。

〈課題2〉 課題1で、できあがった「幼児の体操教室での Com 分類カテゴリー」を基盤として、「体ほぐし」による幼児の Com の変化を、量的・質的に明らかにする。

【方法】

1. 研究対象

茨城県つくば市の洞峰体育館で行われている「幼児体操教室」に通っている幼児8名(男子5名、女子3名)。

2. データの収集

データ収集をするために、7月から9月全ての活動をビデオ撮影した。そのうちの、7月23日、9月10日、17日、24日の4日間、さらに体操教室60分中、グループ活動が始まったとみなされる「なか」の部分、約45分の活動を分析の対象とした。

3. データの取り扱い

録画された幼児の行動・言語 Com・非言語 Com を逐語記録としてデータ化した。本研究で扱う言語 Com とは「言葉を使った Com の全て」であり、非言語 Com は「言葉以外の手段を用いた Com (身振り、アイコンタクト、肌と肌の接触動作、うなづき、アイコンタクト、沈黙(無反応))」と定義した。

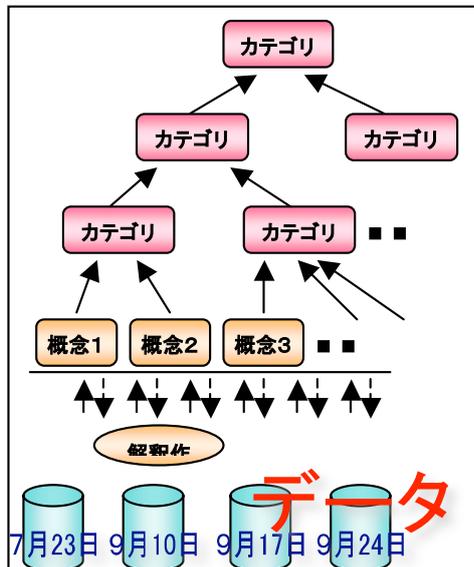
4. 分析方法

1) 課題1について

「幼児の Com の分類カテゴリー」を構築するために、M-GTA 用いた。具体的な手順を以下に記し、図式化したものを図1に示した。

- 収集したデータの意味解釈をし、概念を生成する
- 生成した個々の概念について、2つの以上の概念が関係づけられたら、カテゴリー化する
- カテゴリーを小カテゴリー・中カテゴリー・大カテゴリーとレベルを上げ、大きなまとまりにする

図1 M-GTAの分析方法



2) 課題2について

課題1で生成された概念・カテゴリーのデータ数を用いて、幼児の Com の「日にち・プログラムごとでの変化」を見た。

6. プログラムの内容

7月・8月は、普段どおり《交流の少ない》体操技術向上のためのプログラムを行った。そして9月10日・17日・24日の3日間は、《仲間との交流を重視した体ほぐし》を前半の「運動あそび」の時間に取り入れた。表1に7月から9月のプログラム内容を記した。表2に体ほぐしプログラムの内容を記した。

表1 7月から9月のプログラム内容

		運動あそび	主運動
第1回	7月 9日	その他	平均台
第2回	16日	フラフープ	鉄棒
第3回	23日	Gボール	トランポリン
第4回	8月 20日	トランポリン	マット
第5回	27日	その他	平均台
第6回	9月 10日	その他	とび箱
第7回	17日	フラフープ	鉄棒
第8回	24日	Gボール	トランポリン

表2 取り入れた体ほぐしの内容

9月 10日	<ul style="list-style-type: none"> ・円になってストレッチ&自己紹介 ・ソフトジムボール ・風船あそび
9月 17日	<ul style="list-style-type: none"> ・円になってストレッチ&自己紹介 ・2人組ストレッチ ・フラフープでコーヒークップ(回る-止まる) ・ペアをチェンジゲーム
9月 24日	<ul style="list-style-type: none"> ・円になってストレッチ&自己紹介 ・Gボールで2人組バランス ・2人組ストレッチ ・手をつないでコーヒークップ(回る-止まる) ・タッチタッチ(2人組で)

【結果と考察】

1.課題1

1) 生成された概念

「幼児から先生へ」で17の概念、「幼児から幼児へ」で30の概念、「幼児から保護者等へ」で2の概念、「相手に伝える意思のないもの」で5の概念、合わせて54の概念が生成された

表3 概念表の1例

概念	定義	具体例
遊びへの誘い(非言語コミュによるもの)	相手の気を引くように、相手の背中や指でタッチしたり、とおせんぼをしたりするもの。ちよっかいを出しているものもここに含む。	S男がニコニコしながらY子とおせんぼする
見て見て・できるよアピール	「見て見てー(僕こんなに飛べるんだよ)」等と、一人遊びをしながら友達の気を引こうとしている発言。	見て見てー(僕こんなに飛べるんだよ)

2) 生成されたカテゴリー

生成された54の概念について他の概念との関係をひとつずつ検討していった。その結果37個のカテゴリーが生成された。表4に「幼児から幼児へ」のComのカテゴリー表を例として示した。

表4 「幼児から幼児へ」のカテゴリー表

Comの発信	相手の反応を引き出すような発信	先行発信
		遊びへの誘い(言語コミュによる) 遊びへの誘い(非言語コミュによる) 見て見て・できるよアピール 教えてあげる お話のきっかけ(情報伝達)
		随伴発信
		遊びを工夫「もっとこうしようよ」 随伴発信(遊びの誘い) 新着情報付加発信(お話に対して)
		おともだち大好き
		~さんと一緒にいい!(言語コミュ) ~さんと一緒にいい!(非言語コミュ) ~さんと一緒に嬉しい! 好き(一方的な視線) 好き(2人でニコッとアイコンタクト) 好き(くつつく) 好き(手をつなぐ) 好き(だっこ) 好き(その他のボディタッチ)

2.課題2

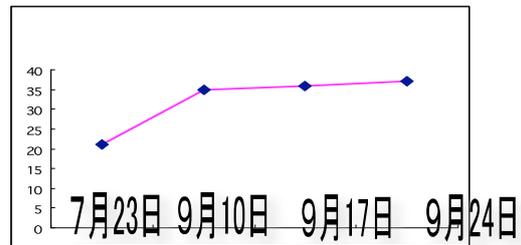
構築された分類カテゴリーを用いて、「体ほぐし」による人間関係の変容を、Comの量と質の変化から分析したところ、「体ほぐし」による影響を受けたものは、「幼児から幼児へ送信したCom」「相手に伝える意思のない楽しい感情の表出」であり、「幼児から先生へ」・「幼児から保護者へ送信したCom」は、本研究では影響が認められなかった。

抄録では、体ほぐしの運動による影響が出たものだけを取り出して結果・考察としてまとめた。以下、概念を___、カテゴリーを【】で記す。

1) 「幼児から幼児へ」 変容その1

図2より、カテゴリー【相手の反応を引き出すような発信】のデータ数が、7月に比べて9月の3日間で顕著に多くなった。このことを子供が「自己の思いを表出できるようになった(Comが活発になった)」と解釈した。そしてこの変容は、9月の3日間に行なった「体ほぐし」に影響されている、と推察された。

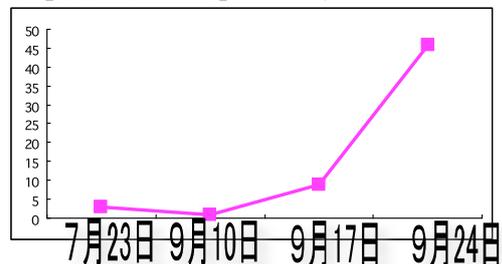
図2 【相手の反応を引き出すような発信】のデータ数



2) 「幼児から幼児へ」 変容その2

図3より、カテゴリー【おともだち大好き】のデータ数が9月24日で特に多くなった。このことに特に影響を与えている要因は、~さんと一緒にいい、~さんと一緒に嬉しい!、好き(手をつなぐ)と(だっこ) という概念のデータ数の急激な増加だった。これらは、「タッチタッチ」という「体ほぐし」の後に多く出現したことより、「タッチタッチ」に影響されていると推察した。そして、この変容を、「好き」という気持ちを「言語Com」と「ボディタッチ」で表すようになった、と解釈した。

図3【おともだち大好き】のデータ数



3) 「相手に伝える意思のない楽しい感情の表出」の変化について

楽しさ表現の表出は「プログラムの楽しさ」を見る指標となった。楽しさ表現の表出が多く起こった6場面で、ビデオ観察等から楽しさの要因(楽しさの質)を解釈したところ以下のようになった。

「トランポリン」	} 動きの楽しさ(めまい)
「円になってまわる一止まる」	
「フラフープでコーヒーカップ」	
「手つなぎコーヒーカップ」	
「風船遊び」	→風船の珍しさによる楽しさ
「タッチタッチ」	→肌と肌を触れ合わせる楽しさ

4) 「体ほぐし」による Com の変容のまとめ

楽しさ感情の表出の多かった「体ほぐし(タッチタッチ以外)」の楽しさ要因は、直接の交流ではなく「動きの楽しさ」や「風船というものの珍しさによる楽しさ」だった。しかし、「体ほぐしの運動」を取り入れていない7月に比べて、9月の3回は、「自己の思いの表出」が顕著に増え、Com が活発になった。このことより、タッチタッチ以外の体ほぐしで「体が弾み、心も弾んで、気軽に、いつのまにか「スイッチオン」の状態になり、自分(幼児)の心を「ひらく」ことができたからではないかと推察される。

「タッチタッチ」は、他の「体ほぐしの運動」と違い、ボディタッチという「直接のかかわり合いや触れ合いを体験できる運動」である。9月24日のタッチタッチ後のプログラムで、ボディタッチ等の好き表現が増えたのはそのことが原因だったと推察される。

幼児にとっては、タッチタッチが「かかわる系」の体ほぐしであり、それ以外の体ほぐしは「ひらく系」であったといえる。

【結論】

本研究では M-GTA を用いて「幼児の体操教室における Com の分類カテゴリー」を構築し、それをもとに、「体ほぐし」による人間関係の変容を、Com の量と質の変化から分析した。その結果以下のことが明らかになった。

1) 先の分類カテゴリーでは、「幼児から先生へ」「幼児から幼児へ」「幼児から保護者等へ」「相手に伝える意思のないもの」において、合わせて54の概念と17個のカテゴリーになった。

2) 構築された分類カテゴリーを用いて、「体ほぐし」による Com の量と質の変化を分析したところ、「体ほぐし」により影響を受けた Com は、「幼児から幼児へ送信した Com」「楽しい感情の表出」であり、「幼児から先生へ」と「幼児から保護者へ」送信し

た Com には、本研究では影響が見られなかった。

3) 「体ほぐし」による幼児の Com の変容には2つのパターンが認められた。1つめは『ひらく系』の「体ほぐし」をすることによって、Com が活発になった、というものであった。それは、体がはずんだことによって、心も弾んで「スイッチオン」の状態になったからだと推察された。2つめは、『かかわる系』の「体ほぐし」をすることによって、その直後のプログラムにおいても、「抱っこ」や「手をつなぐ」などの「好き」表現が多く現出され、仲間との距離も極めて近くなった、というものであった。それは、直接のかかわり合いや触れ合いを体験することによって、肌と肌を触れ合わせる心地よさを感じたからだと推察された。

【今後の課題】

1) 本研究で明らかになったコミュニケーションの実態は、体操教室45分間×4日分に参加した、抽出グループ8名という対象に限定されたものであったため、想定しうる多様なプロセスの一部を取り扱ったものにすぎないと考える。よって、本研究の知見を「体操教室における、幼児のコミュニケーションの変容一般」に拡大しうるためには、その研究対象の範囲を拡大する必要があると考えられる。

2) 本研究で焦点を当てたのは、「幼児から先生へ」「幼児から幼児へ」「幼児から保護者へ」のコミュニケーションと「相手に伝える意思のない楽しさ感情の表出」であった。このため、幼児のコミュニケーションの変化に影響の大きい「先生から幼児へ」のコミュニケーションについては結果に含まれていない。そこで今後は、今回の分析対象外となった「先生から幼児へ」の部分にも目を向けていく必要があると考える。

3) 本研究で採用した M-GTA は、かなり研究者の主観的な判断によるものが多い。このことは同時に研究者自身の質が研究の内容に関与することを示している。本研究の信頼性・妥当性を高めるため分析者を多くするなどの工夫をする事が必要となってくる。

【参考・引用文献】

- 1) 遠藤卓郎 (2000) 「体ほぐし」の体育的意味 - 気功の立場から - スポーツ教育学研究, Vol.10, pp121-124
- 2) 木下康仁 (2007) 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法: 富山大学看護学会誌 Vol.6, No.2(20070300) pp. 1-10
- 3) 村田芳子・川口啓・山本俊彦・五十嵐淳子 (2001) 「体ほぐし運動」活動アイデア集, 教育出版
- 4) 高橋和子 (2004) からだ一気づき学びの人間学一, 晃洋